

日本に翻訳・紹介された朝鮮文学について (法政大学国文学会創立40周年記念特集)

任, 展慧

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

16

(開始ページ / Start Page)

85

(終了ページ / End Page)

96

(発行年 / Year)

1966-11-26

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019170>

日本に翻訳・紹介された朝鮮文学について

任 展 慧

一九四五年以前の日本に翻訳・紹介された朝鮮文学の概観を、散文、詩、民謡においてとらえてみようと思う。

I

日本に紹介された最初の近代朝鮮作家の作品は、玄鎮健の短篇『火事』（蔡順秉訳）である。これは「朝鮮の近代文学」（蔡順秉）という文とともに、新潮社から発行されていた『文章倶楽部』誌（一九二五年九月）に掲載された。

『火事』は、一五歳で嫁にきた少女が、夫と姑の苛酷な仕打ちからのがれようと婚家に火を放つという、自然主義的色彩のこい短篇である。この作品は、一人の少女のかなしみと、その破滅的な行為を描くことによって、朝鮮の農村の貧しさが生んだ早婚制度の悲劇の輪廓を、おぼろげにはあるが示すものになっている。また二年後、同誌（一九二八年一〇月）に紹介されたものに金東仁の短篇『馬鈴薯』（李寿昌訳）がある。

「喧嘩、姦通、殺人、窃盗、乞食、懲役等人生のありとあらゆる罪悪と悲惨との発酵地たる、この七星門外の貧民窟に転がり込んで

来る前までは、福女夫妻は純朴な農民だった。」

だが、彼女の夫が「稀代の怠け者」であったことから、「貧しくはあるが、善良な農家で躰がよく育った」彼女の人生は大きく変えられ、身を売ることをよぎなくさせられる。

彼女のところに足しげく訪れるようになった中国人「王」が結婚するとのことを耳にした時、彼女は、はげしい嫉妬をもやす。式の当日、鎌を手にして「王」のところにのりこんでいく。が、彼女は「王」の手にうばわれたその鎌で「頸動脈」を切られてあっけなく死んでしまう。この作品は、こうしめくくられている。

「彼女の亡骸（なきがら）は真夜中に王の家から自家へ移された。（略）王は無言のまま懷中から財布をひき出すと、彼女の夫には十円札三枚を漢方医者には十円札二枚を、各々握らしてやった。翌る日、福女は脳溢血で急死したとの診断の下に、共同墓地に葬られた。」

この作品は、貧しさの犠牲になった無知な女性のあわれさを描きながらも、彼女のおろかなコケッティッシュに描くことに作者の力点がおかれているために、作品そのもののあたえる迫力は、いちぢる

しく弱いものになっている。

なにはともあれ、日本に早く紹介されたこの二つの作品が、手法上の制約や視点のせまさやという、いくつかの欠点をもちながらも、それなりに当時の朝鮮の社会が直面していた問題——封建的しがらみと、日本帝国主義の植民地体制強化によってひきおこされる混沌と貧困の激化——の片鱗をおのずから示唆するものとなっていて印象的である。

朝鮮のプロレタリア文学運動は、三・一運動以後急速にひろがったマルクス・レーニン主義の影響のもとに、自然主義文学を中心とした「芸術のための芸術」や、民族解放闘争をきりはなした民族主義的な文学などに対するたたかきを通して成長してきた。一九二七年九月「カップ」（朝鮮プロレタリア文学芸術同盟の略）の再編成という形で、まず、それは示された。崔曙海の「脱出記」「飢餓と殺戮」李箕永の「貧しき人々」「元甫」、趙明熙の「地下へ」「R君に」、韓雪野の「過度期」「相撲」など、朝鮮プロレタリア文学の初期をかざるこれらの作品が、相ついで発表されたのは、いずれもこの時期である。

だが、このような朝鮮プロレタリア文学運動の活気にみちた動向は、ほとんど日本に知らされていなかった。わずかに『プロレタリア芸術』や『文芸戦線』に発表された李北鳴、金熙明の断片的な文があるにすぎなかった。

したがって一九三一年三月『ナップ』に掲載された安漢の「朝鮮におけるプロレタリア芸術運動」は、朝鮮プロレタリア芸術運動の概観を正しく紹介した最初のものとして意義がある。安漢は、この

なかで日本帝国主義に抗し、民族解放をめざしてたたかう朝鮮プロレタリア芸術運動の基本的な性格を、こう明示した。

「それは階級闘争の激化が芸術戦線の上にも反映して、プロレタリア芸術はボルシェヴィキ化の道程へ、ブルジョア芸術（民族主義芸術、芸術のための芸術、社会民主主義芸術等一切）はファッシ化の道程へ進行し、かくして朝鮮芸術戦線は、階級の関係が『階級対階級』に依る厳然と敵対し闘争する両陣営に対峙されており、中間的存在である小ブルジョア芸術家は、その何れかに加担しなければならぬ事態となった。

これが階級闘争の激化に依って特質づけられた現今の朝鮮芸術戦線の基本的特徴である。」

安漢のこの論文は、朝鮮プロレタリア文学運動の概略を示すものになっており、それ以後発表されたいくつかの朝鮮文学紹介（例えば李光洙の「朝鮮文学」・『改造』一九三二年六月、張赫宙の「朝鮮文壇の現状報告」・『文学案内』一九三五年一〇月、林和の「現代朝鮮文学の環境」・『文芸』一九四〇年七月など）のなかでも特異な存在として、ひとときわ光を放っている。

一九三〇年代後期は、朝鮮プロレタリア文学の紹介がはじめられたことによって、忘れることのできない年代になっている。そのさきがけになったのは、朝鮮プロレタリア文学の記念碑ともいえるべき李箕永の長篇『故郷』であった。『文学案内』誌は、一九三七年一月・四月号にかけて『故郷』（高秀明訳）の連載をおこなった。だが、このような記念すべき試みも、日帝官憲弾圧のため中途にて中止をよぎなくさせられた。日本人が『故郷』の全訳によって「日本

の統治時代の、朝鮮の貧窮した農村の現実と、朝鮮の農村の土の匂いをかぐこと」(李箕永)ができたのは、実に、それから三三年後の一九六〇年になってからのことである。高秀明訳の『故郷』は、原作にかなり忠実でありながらも、会話の方言語訳が粗雑であり、全体の翻訳の質を低める結果になっている。

この年、さらに特筆すべきことは、『文学案内』誌が、二月号を「朝鮮作家号——特集」としたことである。これには張赫宙の「現代朝鮮作家の素描」とともにつぎのような作家の作品が掲載された。

『裸の部落』李北鳴・『白い開墾地』韓雪野・『金講師とT教授』玄民・兪鎮午・『長山串』姜敬愛・『蕎麦の花の頃』李孝石。

「洪水の後の荒寥とした山地帯は勿体ないようないいお天気だが、山の裾から捲れ上つて来る霜気をおびた秋風はしやぶるよういうすら寒い」と、書きはじめられている韓雪野の『白い開墾地』は北朝鮮の「K平野」を背景にして、日本人の朝鮮進出によってひきおこされる小作農民の転落・離村とたたかいの様相をリアルに描いた佳作である。

また、兪鎮午の『金講師とT教授』は、植民地朝鮮における朝鮮人インテリのひとつのタイプを、みごとに描きだしたものとして見落すことはできない。「東京帝大」出身の「金万弼」は、朝鮮の「官立S専門学校」のドイツ語講師になる。当校最初の朝鮮人教員である「金」に対して、日本人教授たちはあからさまな輕蔑を示す。そのなかで、ただ一人「金」に親切なのは「T教授」であった。

だが、この「T教授」が、「金」の大学時代のこと(左翼学生団

体のメンバーであったこと)を知っているだけではなく、朝鮮語まで勉強して「金」が朝鮮語新聞に発表した文にまで目を通しているのを知らされた時、「金」は、あらためて自己の周囲にはりめぐらされている監視の目を意識する。あくる年の春、「T教授」のすめるままに就職のさい世話になった日本人「H課長」のところにいきついでかける。「H課長」は、「金」の顔をみるやいなや、いきなり「この恩知らずが……」と、どなりつける。「朝鮮統治の役人が××主義者を学校に入れてそれでいいというのか。(略)生じっか、君たち朝鮮人の立場に同情したのがいけなかったんだ。」茶を運んできた夫人の後にあらわれたのは、「いつも変らぬ春の風のような駭蕩たる微笑を顔一っぱいに浮べたT教授」であった。

このように兪鎮午は、日本人教授「T」によって学校を追われる「金講師」を描いて、朝鮮における日本帝国主義の植民地政策のお先棒かつぎに狂奔する日本人インテリのみにくさと、その朝鮮人蔑視の根深さとを、するどくえぐりだしたのである。また、職を失うのではないかとおどおどし、日本人学生に対してすら植民地人としての抑圧民族に対する「本能的な警戒心」を抱かずにはいられない「金」のやりきれない内面の動きが、生き生きと描きわけられている。ここには、あらゆる知的職場からはみだされ、しかも現状打破の強靱な意志も行動力もち合わせていない以上、無氣力にその日その日を惰性的に生きていくより仕方のない、当時の朝鮮人インテリのひとつの像が、あざやかにうきばりにされている。

このようにして、現代朝鮮作家の作風とテーマとが、大まかにではあるが日本に紹介されだしてきた。

一九三九年一〇月、『モダン日本』誌は「朝鮮版」——臨時大增

刊——をだした。これには、李光洙の『無明』、李泰俊の『鴉』、李孝石の『蕎麦の花の頃』が、それぞれ翻訳・紹介されており、同一二月号には兪鎮午の『秋』が掲載されている。『秋』は、めまぐるしい時流からはみだされてしまう一インテリのおきらめや慨嘆の錯綜する心理を、植民地に生きるさまざまな人間像との対比のもとで描きだしたものである。『金講師とT教授』に横溢していた、この作家の若々しい気力と批判とするどきは、もはや、すこしもみいだすことができない。自己の身辺雑事に材をもとめ、かろうじて良心を傷つけずにひっそり生きる以外に、道を閉ざしてしまったのだともいえよう。ともあれ、兪鎮午の『秋』は、植民地朝鮮における同伴者文学とよばれるもののゆきつく境地を端的に示すものとして、興味ぶかいものがある。

翌年の一九四〇年には、二つの朝鮮文学集が刊行されている。ひとつは申建沢編の『朝鮮小説代表作集』（教材社刊）であり、いまひとつは秋田雨雀、村山知義、張赫宙、兪鎮午編による『朝鮮文学選集』三卷（赤塚書房刊）である。

『朝鮮小説代表作集』には、つぎのような作家の作品が収められている。

『少年行』金南天・『苗木』李箕永・『豚』李孝石・『滄浪亭記』兪鎮午・『童話』蔡萬植・『崔老人伝抄録』朴泰遠・『軍鶏』安懷南・『野ばら』金東里・『逆説』崔明翊・『赫い山』金東仁・『見知らぬ女人』李先洙・『つばさ(翼)』李箱・『農軍』李泰俊。
なかでも金東仁の『赫い山』は、満州を流浪する朝鮮人の悲劇を描いたものとして印象的である。

『朝鮮文学集』には、一六人の作家の作品が収められている。

(一卷) 『鴉』李泰俊・『金講師とT教授』兪鎮午・『蕎麦の花の頃』李孝石・『長山串』姜敬愛・『秋』兪鎮午・『無明』李光洙

(二卷) 『地脈』崔貞熙・『距離』朴泰遠・『姉の事件』金南天・『足指が似て居る』金東仁・『摸索』韓雪野

(三卷) 『謙虚』安懷南・『自殺未遂』廉想渉・『嵐』李石薰・『無窮一家』金史良・『心紋』崔明翊

『摸索』の作者韓雪野は、一九三四年の日帝による「カプ」の強制解散と同時に逮捕、投獄された。一九三六年、出獄と同時に、獄中で構想をねったといわれる長篇『黄昏』の執筆に着手した。

日本帝国主義が他民族支配における言語政策の重要性にいち早く着眼し、「併合」当初から朝鮮語の抹殺に狂奔してきたことは、あまりにもよく知られている。一九四〇年代にはいつてからは、朝鮮人作家の朝鮮語による創作は、一切、発表の道を閉ざされるといふところまでおいつめられた。一九四〇年に書かれた『摸索』は、一切の自由をうばわれ自意識だけが異常に鋭くなっていくインテリの苦悩と、時流に押し流されていく周囲に対する反抗心とを、無知ではあるが「俠氣」ある彼の妻との対比のもとで描きだしたものである。ねちねちした筆の運びと暗示的な表現のなかには、日帝に対する朝鮮民族の屈することのない抵抗心が、おのづからあふれていく。この作品は、その前の年に書かれた『泥潭』とともに、解放前夜の朝鮮における暗く閉ざされた時代のけわしい様相と、それらの重圧のなかにあっても、人間らしさを失うことのなかった一九四〇年代の朝鮮の良心を証しだてるものとして貴重な作品

になっている。

さきの二つの朝鮮文学集が刊行された同じ年に、李光洙の短篇集『嘉実』（『無明』・『夢』・『鷺庄記』・『乱啼鳥』・『血書』・『嘉実』）と『有情』『愛』とが、ともに「モダン日本社」から出版された。「言文一致」運動の先覚者であり、自称人道主義者の筈であった李光洙は、日帝の植民地体制の強化とともに民族主義運動から訣別し、仏教の世界に足をふみ入れた。「姓氏改名」が押しつけられるや、李光洙はいちはやく「香山光郎」と改名し、朝鮮文人協会の会長をつとめる一方、日本帝国主義の御用文学者大会であった「大東亜文学者大会」の二回大会には、朝鮮代表として参加した。短篇集『嘉実』は、こうした李光洙の仏教への傾斜と、日本帝国主義の婢女としての転落への道程を、李光洙自身が示すものになっている。重なる投獄と沈黙のなかで、解放の日まで民族的自覚と日本帝国主義に対する敵愾心を少しも弱めることのなかった前記の韓雪野にくらべて、李光洙は、また何と破廉恥であったことだろうか。

『文芸』誌が、朝鮮文学特輯をおこなったのも、同じ年、一九四〇年七月のことである。

これには、俞鎮午の『夏』、李孝石の『ほのかな光』、張赫宙の『慾心疑心』、金史良の『草深し』が掲載されている。

太平洋戦争の始まる年の夏、一九三〇年代から四〇年代という暗黒の時代に「朝鮮語それ自体をみがき、うつくしくした作家」（金達寿）李泰俊の短篇集『福德房』（鄭人沢訳）が「モダン日本社」から刊行されたことは、まさに驚きにちかい感動をあたえずにはい

ない。この短篇集には、つぎのような作品が収められている。

『寧越令監』・『月夜』・『桜は植えたが』・『孫巨富』・『佗しい話』・『愚庵老人』・『福德房』・『不遇先生』・『アダムの後裔』・『鴉』・『農軍』・『ねえやさん』・『土百姓』・『兎物語』・『夜道』。

「頑な」までに「現実と妥協」することを拒み、「いつも清らかさと爽やかさと香氣」とをもっていた友人が世俗的な人物になりさがってしまった時の感慨を描いた『佗しい話』あるいは「桜の花が雲のように咲き出せば、無知なこの土地の農民たちも自村を愛する心を深めて矢鱈に村を離れることはあるまい」という郡の対策にもかかわらず、土地が日本人会社のもものになってからめっきりふえだした借金のために村を出てゆく農民を描いた『桜は植えたが』や、また、金があるのなら「新聞を始めますぢや。現に三つあるにはあるが、あれは新聞ではない、あんな新聞なぞ百あっても物の役に立たぬ」と、京城をさすらい歩きながら世を慷慨する老人を描いた『不遇先生』など——そのいずれもが、植民地という不幸な時代を生きる朝鮮人の悲哀と傷心にみちみちた心のひだを、愛情こめて描きだしたものである。

II

朝鮮現代詩の日本への紹介は、金素雲の訳による『乳色の雲』（一九四〇年・河出書房刊）、『朝鮮詩集』の「前期」・「中期」（一九四三年・興風館刊）の三冊によっておこなわれた。

ここでは、『乳色の雲』に補充されて編まれた『朝鮮詩集』をみていこうと思う。『朝鮮詩集』の「後期」は、「時局性の乏しい」と

いう理由」(尹紫遠)で出版不可能になったという。「前期」・「中期」には、韓竜雲、金億、金炳元、金廷湜、金東煥、金東鳴、洪思容、吳相淳、朱耀翰、趙明熙、鄭芝溶、卞榮魯、朴莫熙、朴鐘和、朴八陽、李光洙、李相和、李章熙、梁柱東、盧子泳、異河潤、許保、金允植、金起林、金珖燮、金尚鎔、金泰午、金大鳳、金竜濟、吳熙秉、辛夕汀、趙重洽、白石、朴世永、朴竜喆、毛允淑、李相、李燦、李陸史、柳致環、林学洙、林和、盧天命の四十三人の作品が収められている。ここには、朝鮮現代詩のよってたつ土壤のきびしさを伝えるものに、故郷の荒廃をうたったものが目立つ。異河潤は、

北門の／道の傍に草生へる／無縁仏の／塚一つ。

さすらひの／旅ゆく人が足とめて／塚のほとりに／憩ひしが、
国道の／拓かれてよりかの塚の／押し潰されて／跡もなく、

略

とうたい、朴竜喆は、よりきびしく故郷への愛に鞭打った。

ふるさとを恋ひて何せむ／血縁絶え 吾家の失せて／夕鴉ひと
り啼くらむ／村井戸も遷されたらむ。

略

植民地朝鮮の詩人たちの口をついて最初にうたわれたうたが、う
しなわれてゆく故郷によせる愛と深い心のうずきであったのも、当
然なことであったといえよう。きびしい寒さにおののく「裸木」の
たたずまいに祖国の姿をみた許保は、こう慟哭した。

すがれたる冬を轡ひ／雪白く降りて／裸木に衣蔽へど／はかな
しや 凍れる枝に／萌え出づる芽はあらざり

祖国の地に新しく「萌え出づる芽はあらざり」と断定した詩人の
前にくりひろげられるのは、悲哀と絶望の灰色の世界でしかないで

あろう。絶望や弱さは、それがはっきり自覚されている限り、その
絶望や弱さをかいくぐって生まれる凜烈な生命のほとばしりを可能
にし、あるいは根強い反抗を内側から支えるエレメントの一つとし
てさえ機能しうる。

ただ、それらがあくまでも絶望や虚無や頹廃にとどまっている限
りの作品は、わたくしたちの財産目録から容赦なく除外されねばな
らないであろう。植民地という暗黒の時代にこれらの詩人たちは、
どう自分自身や現実にあたむかっていったのであろうか。

デョーヂ・トムソンは、詩の機能にふれてこう書いている。

「詩というものはおしなべて、もともと一つの社会的行為であり、
そのなかで詩人と大衆とが一つになる行為なのです」

デョーヂ・トムソンのこの明快な指摘は、これらの詩人たちに向
けられる照準規定の一つになるのではないだろうか。

「素雲という人は、きびしいものや、抵抗的な内容の民謡にあま
り興味がなかったかもしれない。しかしそれ以上に朝鮮人に対する特
有の検閲のきびしさを考慮したためかもしれない。『朝鮮詩集』の
選択の場合にも同じものが働いているにちがいない」と、藤間生大
は『民族の詩』のなかで書いたことがある。

どんな時にも完全無欠なアンソロジーというものは至難である
ことや、出版不可能になった「後期」を念頭におきながらも、『朝
鮮詩集』の作品選択における金素雲の基本的態度が、藤間生大のい
う「きびしいものや、抵抗的な内容」の詩をうとんじたものである
ことは否めない。たとえば「うばわれた野にも春は来るか」の作者
として知られている李相和の場合、「カップ」加盟前の倦怠と頹廃
的な気分にみちた「わが寢室」一篇のみが収められている。したが

って、あの時代に、これだけの詩集を編んだ金素雲の功績として認めるにしても、作品選択の基準が、あくまでも朝鮮民族の痛苦や願望からかけはなれた場での詩の流れにおかれていたことを見落すならば、片手落ちの評価をまぬがれないであろう。

朝鮮の代表的な詩歌形式である時調の紹介をしたものに、『朝鮮古歌謡集』（孫晋泰編・一九二九年、刀江書院刊）がある。時調が民族性を喪失し、ひたすら漢詩への追従に終始したとはいうものの、ここにはいつの時代にも変らぬ人情の機微を生き生きと伝えたものや、作者不明のうたのなかには、働く民衆の姿をたくみにうたいあげたものもめにつく。

なかに農事記的な体裁をとりながら、農民たちに儒教と支配階級への忠誠を強制したものに「農家月令歌」がある。「正月は孟春、立春、雨水の季節である」「二月は仲春、驚蟄、春分の季節である。」と、一二月までうたいつづけられている。

「老寄り」は気力無く、骨折れる仕事は出来まいが、昼は棟梁を編み、夜の間は縄綱うて、時を違へず屋根葺けば、大心配が除かれる、「桑の芽から察してみれば蚕の生れ出る時になった、聴けよ、婦女たち、蚕農を始めねばならぬ」と、月々の仕事の配分と指図とが、民俗的な行事をたくみにおりこまれながらうたわれている。ここには、農業の些事にわたって、懇切な注意がゆきとどいている感じがするのだが、このうたは、農民を実生活だけではなく精神生活の領域までも封建道徳で規制することに、その主目的がおかれていることをしらせる。「大君の民となり、御恩で生き行けば、蜘蛛のような我々百姓、何でそれに報い得よう、年間の僅かな身役、重いとは言はれませぬ、お官からの借穀も期限前に、返上するのが至

当でせう」とうたいながら、こうしめくくられている。「人には夫々福分があつて、無理をしても駄目なのです。——略——ああ我が言ふを聴け、農業は如何である、終年勤勞すると言ふも、その中に楽しみがあらう。」ここには、何時の時代にも変ることのない支配階級の苛酷・貪欲・陋劣な本質がむきだしにされていて興味ぶかい。本書には、このようなうた五〇〇首ほどが収められている。編者は、翻訳にあたって「口語体・意識」に主眼をおいたと書いているが、このことは翻訳スタイルの単調化・卑俗化を生み出した一因にもなっているようだ。

一九四一年、三好達治は『文学界』（五月、八月、十月）誌に、「漂泊詩人金笠に就て」を書いている。

金笠（一八〇七—一八六四）は、両班の家に生をうけたが、彼の祖父が洪景来の農民戦争の際、農民軍に投降したのかどで、一家は廃族にされたのであった。金笠は、血縁的社会的なかわり合いを拒絶し、その生涯を流浪のなかでの詩作にすごした。旅の生き方は、金笠に社会の矛盾と人間の表裏を冷静に観察させることになり、彼の詩題は、同時代の詩人たちのそれにくらべて、おどろくほど広く豊富なものになっている。金笠は、その生いたちの奇偶と彼独得の諧謔、奔放な作風とで、わが国に広く親しまれている詩人のひとりである。

金笠は、権力に媚びへつらうことを嫌い、両班階級の腐敗や非人間性を、鋭い風刺であばきつづけた。両班階級の腐敗、墮落ぶり、『春香伝』をもちだすまでもなく、いくたの文学作品のなかで告発されてきた。なかでも、金笠の生まれる二年前にこの世を去っ

た朴趾源の『兩班伝』は、さまざまに語りつがれながら、民衆の兩班階級への批判精神の根を広くたくましく張りつめていくのに大きな役割を果たしたのであった。金笠の詩が、朝鮮民衆に愛されうけられる素地は、こうして充分ととのつていたのだともいえよう。だが、三好達治は、金笠について皮相的な理解しかできなかった。「漂泊詩人金笠に就て」のなかで、三好達治はこう書いている。

「笠は宿なしの乞食詩人のことであるからその詩は殆んど例外なく感愴痛嘆の氣息によつて貫かれたものであるのは誰にもた易く想察されるところである。——略——笠の人氣が彼地の俗間に於て比肩するものなく圧倒的なのは凡そこの苛辣を極めた惡罵のそのある程度の品の惡さそのものと最も密接に相關連してゐるかの知くに考えられる」と。そのような、「譏笑大惡罵の例」としてあげられているのが、つぎの詩と大意である。

嘲幼冠者

畏鳶身勢隱冠蓋 何人咳嗽吐棗仁
若似每人皆如比 一腹可生五六人

「鳶がこわくて縮み上ると、そっくりシャッポにかくれるじゃねえか、誰がそんな棗の核を吐きだしたのか、もしも人間が、みんなそんな代ものなら、一腹に五六人は生めるぢやらうて。」

また、金笠には、

二十樹下三十客 四十客中五十食
人間豈有七十事 不如歸家三十食

という有名な詩がある。これは、漢詩のなかで、漢語を朝鮮語の訓よみにすることでの話呂合わせの面白さをねらったものである。

詩そのものの評価はさておき、金笠の奇抜な諧謔ぶりの一面を示すものではある。

三好達治は、金笠の「この種の語呂遊び」は、「甚だ始末の悪い病弊」であり、これというのも朝鮮民衆の「低俗趣味」によるものだ、と、こう書いている。

「当時の（さうしてなお今日の）一般読者の側にそもそも温床として存するところのその低俗趣味を、たまたま彼の才能が迎え容れて、これを十分に発輝したものだといふべき筋合のもので、彼地の一般的の趣味風尚の一端をこれによつて窺ひ知りうるのも、或は時に一興であらうか。」

民衆の貧しさに心を痛め、邪まなもの、非人間的なものに對して、痛烈な風刺と批判の矢を放ちつづけたこの詩人の活氣にみちた諧謔精神は、なんら理解されなかった。金笠を「優秀奔放な生活の詩人」と評した佐藤春夫にくらべて、三好達治は、金笠を單なる「乞食詩人」として日本に紹介するにとどまった。

III

何を怨もか 国さへ亡ぶ／家の亡ぶに 不思議ない

民族の体臭と風貌を最もあらわに露出するものとしての民謡、とりわけ朝鮮の民謡は、朝鮮民衆の心の種として吸収され、つくりかえられながら、豊かな生命をはぐくんできた。

一九二七年、金素雲は白鳥省吾の主宰する雑誌『地上樂園』に、「朝鮮の農民歌謡」を六回にわたって掲載した。これは、日本における朝鮮民謡紹介のややまとまった形での最初の試みであり、その後の金素雲の『朝鮮民謡集』（一九二九年・泰文館刊）、『朝鮮童

謡選』(一九三三年・岩波文庫)、『朝鮮民謡選』(同)とつづく朝鮮民謡紹介の原型でもあった。

『朝鮮民謡集』には、一五〇篇におよぶ民謡が収録されており、それらは民謡篇、童謡篇、婦謡篇とに大別されている。

見やれ あの雲 仙人乗せて／けふも 天子ヶ峰めぐる。

わしも往きたい あの雲 呼んで、／仙人たちの 酒宴りに。

朝鮮民謡には、おおらかに自然をうたったものや、のどかな情感にあふれたものが多い。

とはいふものの、現実をながめた時、そのような民謡ばかりがあるのではない。

出羽庖丁には 鞘がない／わしゃ作男で 家がない

同じ人間に生まれながら、へだたりのある生活への忿懣をあらわした漁師たちのうたに、こういうものがある。

オホディヤ オホディヤ えいそら 舟出せ 風は追風 波も

静かよ オホディヤ やれそれ 船出せ 癢ぢやないかよ 世

間の奴等は 見上げるばかりの瓦の家でよ 三度三度の 温い

御飯に 仕たい放題(略)同じ人間に 生れながらよ 何の因果

か 漁夫渡世は 風浪一夜で 海の藻屑よ

「癢ぢやないかよ 世間の奴等は」という怒りも、「われらの生

業 愚痴や うらみがどうなるものかよ」という、あきらめに屈折

していく。いや、ぐちとあきらめ以外に、怒りのはけ口を求められ

なかった漁夫たちにとって、こううたい合い作業することは、仲間

意識の確認であり、たがいにはげまし合うことでもあったにちが

ない。また、封建的な家族制度のなかでの嫁と姑の葛藤をうたった

ものも多い。

姉さん 姉さん 四寸の姉さん／嫁の暮らしはどうでした／ど

うにも かうにも 話にやならぬ／康熙の色ほどきれいな裳も

／涙ふき／みな裾せた／蓆一枚ひろげても／足をのぼすは

小姑ばかり、／糠が山ほど出たとても／同嫂の牛が食ふばかり

り、／ざれ米小米を集めても／同嫂の鶏が食ふばかり／米一升

をお釜に炊いて／食べて見よとも言はなんだ。

嫁にとって恐ろしいのは、舅と姑だと、こううたう。「金剛山が

高いとて舅の氣位ほど高から、唐辛子が辛いとて 姑の口先きほど

辛かる。」だが、嫁は泣いてばかりいるわけではない。「盞一つを

粗相」し、舅や姑から「田地屋敷を売ろうとも」「銀の盞は忘れる

な」と、いわれた嫁は、「大部屋小部屋を片付けて花織り簾下に敷

き―略―舅さん姑さん お座りなされ 小婢さんも来ておくれ婢僕

も ここへ来て さて騒がずに聞いておくれ」と、いなおる。「ね

ずみも鳥も 知らぬ間に 夜明けの星も 知らぬ間に 疵の無い身

を毀された、毀した身をば 今の今、元に返してくれるなら 盞一

つは戻しましよ、すんとも言はずに戻しましよ。」ここで聞き手は

「さうともさうとも もっともぢや」と、相づちをうつ。

どんな時にも、カラリとしたユーモアを忘れないのが、朝鮮民謡

の特質のひとつとでもいえようか。だが、朝鮮民謡の本領が、もっ

とも生き生きとあらわされるのは、支配者に向けて放たれる批判の

矢の鋭さと辛辣さにおいてである。

ぶく／＼背中のおぼがへる、／なんで お背が ふくれたの

／全羅監使をしたときに、／道楽し過ぎて ふくれたよ。

ぶく／＼背中のおぼがへる、／なんでお眼々が大きえの、／

全羅監使をしたときに、／睨めつけ過ぎて大けえよ。

醜惡な「いぼがへる」の様相は、朝鮮民衆のつくりだした支配者のカリカチュアとして、精彩を放っている。抑圧者に対するうむことのない批判精神の流露は、朝鮮の民謡・童謡を太くつらぬく一筋の糸であり、それらを武器として、たくみに活用せずにはいなかった朝鮮民衆の卓抜な知恵のあらわれでもある。

このことは、日本帝国主義下の植民地時代において、その本領が、あますところなく發揮されたといえよう。よく知られている「アリラン」の替歌の多様さ、辛辣さはどうであろう。

俺か、お前か、どっちが偉い、／なんの、紙幣が偉いだけ。

書いて下さい、またあの鬼に、／稲もそっくり 取られたと。

なさけ知らぬか 聯絡船は、／鳴らす気笛が うらめしい。

運ぶばかりで 返しちゃ呉れぬ、／聯絡船は 地獄船。

これらの「アリラン」は、『朝鮮民謡集』の巻末にのせられたものであり、これについて金素雲はこう書いている。

「不貞腐れなら、皮肉なら、一切こちとらの領分だとばかり、アリランのデカダンスは何処までも徹底してゐる。(略)朝鮮民謡の特質とされた呑気な快朗性も、こゝまで変貌されては言葉がない。」

だが、これらの「アリラン」こそが、植民地下朝鮮における世相と生活の荒々しい変化をまざまざと映しだしているものであり、銃とサーベルのどんな威嚇をもってしても閉ざすことのできなかった、朝鮮民衆の心のうちをうたったものである。

『朝鮮民謡集』から『朝鮮民謡選』までの四年間に、日帝の検閲がどんなに強化されていったのか、という事実を語るものに伏字

「××」がある。たとえば『朝鮮民謡集』の

どうせ穫れても 食はれぬ米よ／ままよ 早で 稲枯らせ。

亀裂が入るとて 何騒ぎせる、／いらぬ豊年よりや、気が休む。

が、『朝鮮民謡選』では、こう伏字入りになっている。

どうせ収れても ××××米よ／ままよ 早で××らせ。

亀裂が入るとて 何騒ぎやる /いらぬ××××××気が休む。

終りに、雑誌『真入』、『朝鮮』によった日本人たちの朝鮮民謡の紹介、聞き書きの収録があったことを書きそえておく。

× × × × ×

日本文壇の朝鮮文学によせる関心が、急激なたかまりを示したのは、太平洋戦争の始まる前の年の一九四〇年である。『朝鮮小説代表作集』、『朝鮮文学選集』三巻が、相次いで刊行されたのもこの年である。

また、同年三月から『文芸』は、「朝鮮文学通信」を連載しはじめた。『新潮』、『文学界』も、それぞれ朝鮮文学に関する論文にかなりのスペースを割いている。

これらの動向が時流の要請とけっして無縁でなかったことは、日本人文学者たちの発言が証しだてている。「事変の期間に於いて植民地の文学が新らしく、我々の視野に入ってきた。(略)植民地の名の下に、朝鮮と満州とが含まれる」と書いたのは、板垣直子である。朝鮮文学によせる関心の性質を、『新潮』(一九四〇年六月)所載の「政治上より見ての満鮮作家」はこう説明している。

「朝鮮文学には、朝鮮文学で、むしろ満州文学より以上の政治的

可能があることを忘れてはならない。先月の「新潮評論」でも書いてあったが、李光洙以下の朝鮮作家が、こんにち半島内で実践してゐる文学は、みな朝鮮文字で書かれてゐるのである。日鮮合一の建前からすれば、これは大変な問題であつて、よくもいままで、国内の問題にされずにゐたものだと思う。かういふ根本の大問題が等閑に附されてゐたぐらゐだから、その他のことで、まだまだどういふ事柄が、日本国内の大多数者に知られないでゐるかも知れないといふ疑惑が起つて来る。その意味に於ても、朝鮮文学の翻訳といふことが、重大な役割を持つわけである。」

朝鮮人の朝鮮語による創作をこう反駁した右の文は、日本帝国主義の植民地体制の強化にともない、朝鮮文学の日本への翻訳・紹介の必要が強調されだしてきた事情を端的に示すものになっている。国語を奪われた朝鮮人が強いられた日本語で、自国の作品を日本に翻訳・紹介する行為は、単なる「文学交流」とは異なつた性格と意味を持っている筈である。また朝鮮文学の日本への翻訳紹介は、朝鮮人のみの手によつて行われたという一九四五年以前の状態がいまなお続いている。（「日本・朝鮮研究所」を中心にした日本人たちによつて、この状態は少しずつ打破されてはいるものの、まだ大きな力をもつ段階にはいたっていないのが現状である。）

これらの問題を考える際、一九四〇年、端的に示された日本文壇の朝鮮文学への関心の持ち方、被抑圧民族としての朝鮮人作家の母国語による創作をめぐつて行われた、日本文学者のたちのさまざまな論議、朝鮮文化の在り方に對する日本人たちのさまざまな提言などは、見逃がすことのできない大切な資料になっている。

資料 文献 目録

- (一九二五年) 朝鮮の近代文学と現代文学(蔡順秉・文章俱樂部・9) 火事(小説・玄鎮建・蔡順秉訳・同)
- (一九二六年) 朝鮮の古歌と朝鮮人(孫晋泰・東洋・5) 朝鮮の童謡(同・東洋・8) 朝鮮の子守唄と婦謡(同・東洋・9) 朝鮮の文壇・朝鮮の文士(李涙声・文章俱樂部・9)
- (一九二七年) 朝鮮の童謡(清水兵三・朝鮮・113) 朝鮮民謡研究号(真人・1) 朝鮮民謡研究(市山盛男編・坂本書店刊・1) 朝鮮の農民歌謡(金素雲・地上楽園・116) 温突夜話(鄭寅燮・日本書院刊・3) 朝鮮民謡に就いて(同・東洋・7) 朝鮮の芸術運動(李北満・プロレタリア芸術・9) 朝鮮の民謡(清水兵三・朝鮮・819)
- (一九二八年) 朝鮮芸術運動の現段階(金熙明・前衛・1) 朝鮮に於ける無産階級運動の過去と現在(李北満・プロレタリア芸術・4) 朝鮮無産階級運動の過去と現在(李北満・戦旗・5) 馬鈴薯(小説・金東仁・李寿昌訳・文章俱樂部・10) 朝鮮の労作民謡(金素雲・東洋・10) 苦力(小説・金英根・李北満訳・戦旗・11)
- (一九二九年) アリラングの律調(金素雲・民俗芸術・2) 朝鮮のプロレタリア運動とプロレタリア文化(李北満・国際文化・4) 童謡に観る朝鮮の児童性(金素雲・東洋・4) 朝鮮古歌謡集(孫晋泰編・刀江書院・6) 朝鮮民謡集(金素雲・泰文館・7) 朝鮮児童の生活情緒(金素雲・東洋・8)
- (一九三一年) 朝鮮におけるプロレタリア芸術運動の現状(安漢・ナップ・3) アリラン峠(金素雲・東京朝日・三回・8) 壬辰乱(文役) に因む朝鮮民謡の雛子(金素雲・水脈・8) 朝鮮の農村と

農民文芸(李均・農民・9) 朝鮮「農家月令歌」(孫晋泰・東洋・8
19)

(一九三二年) 朝鮮の民謡(高橋亨・朝鮮・2) 朝鮮民謡の時代
的変遷(金素雲・神戸新聞・三回・3) 女を歌へる朝鮮民謡(同・
大阪朝日・3) 朝鮮プロ文化戦線統一のために(金貞植・プロレタ
リア文化・4) 旅に聞く朝鮮民謡(金素雲・旅・4) 民謡と時代
性(同・新民謡研究・4) 朝鮮の文学(李光洙・改造・6) 母を呼
ぶ朝鮮童謡(金素雲・婦人世界・9) 慶州地方に行わるる童謡と民
謡(大阪六村・朝鮮・9)

(一九三三年) 民謡に現われた済州の女(高橋亨・朝鮮・1) 朝
鮮童謡選(金素雲・岩波書店刊・1) 諺文朝鮮口伝民謡集(同・第
一書房刊・1) 朝鮮民謡選(同・岩波書店刊・8)

(一九三五年) 朝鮮文壇の現状(李朝民・文学評論・6) 朝鮮文
壇の現状報告(張赫宙・文学案内・10) 朝鮮文壇の将来(同・文学
案内・11)

(一九三六年) 朝鮮文壇の作家と作品(張赫宙・文学案内・6)
(一九三七年) 故郷(小説・李箕永・高秀明訳・文学案内・1)
44) 朝鮮作家号(文学案内・2)

(一九三九年) 朝鮮版(モダン日本・10) 秋(小説・兪鎮午・呉
泳鎮訳・モダン日本・10) モダン日本朝鮮版・11——鳳仙花(詩・
牛耀翰・金鐘漢訳) 蝶と海(詩・金起林・金素雲訳) 薔薇(詩・毛
允淑・金素雲訳) うたごゑ(詩・金素月・金素雲訳) 焚火(詩・白
石・金鐘漢訳) 白鹿潭(詩・鄭芝溶・金鐘漢訳) 蕎麦の花の頃
(小説・李孝石) 鴉(小説・李泰俊・朴元俊訳) 無明(小説・李光
洙・金史良訳)——

(一九四〇年) 受誦朝鮮詩篇(金素雲・文芸・2) 朝鮮小説代表
作集(申建訳編・教材社刊・2) 朝鮮文学選集(秋田雨雀・村山知
義・張赫宙・兪鎮午編・赤塚書房刊・一卷3・二卷9・三卷12)
朝鮮文学通信(白鉄・林和・文芸・3より連載) 乳色の雲(金素雲
・河出書房刊・4) 朝鮮文壇の代表作家(張赫宙・新潮・5) 嘉実
李実(李光洙・金史良・金逸善・金山泉訳・モダン日本社刊・4)
有情(李光洙・金逸善訳・モダン日本社・6) 愛(同・モダン日本
社刊) 朝鮮文学特輯(文芸7) モダン日本朝鮮版・8——白魚のや
うな白い手が(詩・朴鍾和) 螢(詩・金尚鎔) 罪(民謡・金東煥)
西関(民謡・金億) 哈爾賓駅にて(詩・林学洙・金鐘漢訳) 路は暗
きを(小説・朴泰遠・金鐘漢訳) 村の通り道(小説・金東里・金
山泉訳) 心紋(小説・崔明翊・金山泉訳)——

(一九四一年) 朝鮮民謡集(金素雲・新潮社刊・7) 朝鮮文学と
東洋的課題(韓植・新文化・8) 福徳房(李泰俊・郷人沢訳・モダ
ン日本社刊・8) 石の鐘(童話集・金素雲・東西書院刊・6) 青
い葉っぱ(同・三学書房・11)

(一九四三年) 黄ろい牛と黒い牛(童話集・金素雲・天佑書房刊
・6) 朝鮮詩集(金素雲編・興風館刊・前期8・中期10)